慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『沙石集』 諸本の一考察 : 阿岸本 『砂石集』 を中心として
Sub Title	The study of text critic of "Shasekishu" : Agishi-bon "Shasekisyu"
Author	上野, 陽子(Ueno, Yoko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2002
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.82, (2002. 6) ,p.1- 19
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00820001-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『沙石集』諸本の一考察

――阿岸本『砂石集』を中心として――

上野　陽子

はじめに

『三田国文』第三四号から第三六号にかけて、阿岸本『砂石集』の翻刻を掲載した。阿岸本については、構成上は内閣文庫第一類本に似たところもあるが、語彙レベルでは独自異文の目立つ本という印象を持たれるばかりで、その特徴について具体的に踏み込んだ研究は甚だ少ないように見受けられる。本稿においては、阿岸本の特徴を改めて捉え、『沙石集』諸本の中に位置付けることによって、多種多様を極める『沙石集』諸本の研究に、新たな一材料を提供することを趣旨とする。なお、書誌については『三田国文』第三四号に記載したので、そちらを参照されたい。

一　阿岸本『砂石集』の本文

(1)　阿岸本の独自異文

阿岸本『砂石集』の本文が持つ大きな特徴は、独自異文の多さである。試みに、阿岸本の序の冒頭と梵舜本の序の冒頭とを比較してみよう。

○阿岸本[1]・序（一丁表）

夫麁言衆語皆帰第一義、治生産業併ラ不背実相。然則狂言綺語ノアタナル詞ヲ因トシテ、一仏乗ノ妙ナル道ニ入シメ、世間浅近ノ賤譬（ヒカ事）ヲ縁トシテ、勝義諦ノ深理ヲ知ラシメント欲フ。是故ニ老ノネサメノ徒ナル手スサミニ、見事聞事思出スニ随テ、難波ノヨシアシヲモキラハス、玄甫ノ苑ノアワナシヲモエラハス、フリニシコトハヲシルヘニテ、口ニ任テ綴リ成シ、藻塩草ニナソラヘテ、手ニ任テ攪集。

○梵舜本[2]・序

夫麁言軟語ミナ第一義ニ帰シ、治生産業シカシナガラ実相ニ背ズ。然レバ狂言綺語ノアダナルタハブレヲ縁トシテ、仏乗ノ妙ナル道ニ入シメ、世間浅近ノ賤キ事ヲ譬トシテ、勝義ノ深キ理ヲ知シメント思フ。此故ニ、老ノ眠ヲサマシ、徒ラナル手スサミニ、見シ事聞シ事、思ヒイダスニ随テ、難波江ノヨシアシヲモ撰ズ、藻塩草手ニ任セテ、書キ集侍リ。

阿岸本と同系統に属する梵舜本[3]と比較したが、本文の異同は一目瞭然である。他諸本の序も梵舜本とほぼ同文であり、阿岸本だけが独自異文を持つ。

以上の如き独自異文は阿岸本全般に渡って見られる。では、阿岸本において独自異文は如何なる場合に用いられているのか。それを考察するのに適切な例が、「ささやき竹」として著名な話に見られる。阿岸本の当該話は、梵舜本などよりも米沢本に近い本文を持つため、米沢本と比較する。

○阿岸本・巻二（十五丁裏～十七丁表）

近比勘解由ノ小路ニ利生新ナル地蔵ヲハス。京中ノ男女市ヲ成シテ詣ケル中ニ、容顔ナホヤカナル女房、常ニ通夜（ツヤシ）ケリ。又若僧ノ常ニ参籠シケルカ、此ノ女房ヲ心ニ係テ、何ニシテモ近付ト思ケル余リニ、此ノ女房ヨモスカラ勤メシツカレテ、チト打マトロミタル耳ニ、此法師ネライヨリテ云ケルハ、「下向ノ時、始メテ行合タラン人ヲタノメヨ」ト云テ、ヒソカニ立ノキテミレバ、ヤカテヲキアカリテ、トモナル女童ヲコシテ、急下向シケリ。「シヲウセタリ」ト思テ、アハテ出キツ、行合トスル程ニ、ハキ物ヲ置失テ尋ヌレトモ求メエス。ヲソカリケレハ、カタ〳〵ハキテ、先々下向シケル方ヲヨク〳〵見置テ、勘解由ノ小路ヲ東ヘ往カンスラムトテ走ルニ、石ニ足ヲ蹴（ケチ）倒レニケリ。ハルカニテ起（ヲキ）上テ東西ヲミルニ無ケリ。此女房、可然信者ナルニヤ、烏丸ヲ下リニ往ケリ。暁月夜ニ見レハ、馬ニ乗タル人ノ伴（トモ）ノ者ノ四五人計具タルニ行合ニケリ。チト立留テ由ハミタル気色有ケレバ、馬ヨリ打下テ、「何ナル人ニヤ」ト云ヘリ。左右無ク返事セサケリ。良久有テ、「申ニ付テ憚リ多ク侍レトモ、勘解由ノ小路ノ地蔵ニ祈申事侍リ。『此暁下向ノ時始テ値タラン人ヲ憑メ』ト示現ヲ蒙レリ。申モハツカシク、申サヌモイカ、ト思テ、立アヤフム」由シ語リケリ。此人ト年来ノ妻ニヲクレテ三箇年ニ成ケルカ、此地蔵ニ参テ祈申サン断ニ地蔵堂ヘ参ケル道ニテ、カ、ル事有ケレハ、不及子細、馬ニ舁乗テ宿所ヘ帰ヌ。田舎ニ所領アマタモチテマツシカラヌ武士成ケリ。サテ汗ヲ流シ息ヲ切リ、ツメカケテ鼻血タリ、求メ廻トモ、ナシカハ行合ヘキ。（後略）

○米沢本[4]・巻二

近比勘解由ノ小路ニ利生新タナル地蔵御坐ス。京中ノ男女市ヲ成テ詣ツル中ニ、若キ女房ノ貌形チナタラカナル、常ニ通夜シケリ。又若キ法師参籠シタリケルカ、此ノ女房ニ心ヲカケテ、何ニトシテカ情ケヲモカケント思ケルア

マリ、此ノ女房ヨヒノホト勤シツカレテ打ヤスミタリケルニ耳ニ、「下向ノ時キ、初メテ行合タラム人ヲタノメ」ト云テ、タチノキテミケレハ、ヤカテ〳〵起キアカリテ、女童起コシテ、急下向シケリ。「シオホセツ」ト思テ、出テチカイテ行合ハントスル程トニ、ハキモノヲ置失テ尋ネヌレトモミヘス。オソカリケレハ、ハキモノカタ〳〵ハキテ、サキ〳〵下向スル方ヲミヲキテ、マデノ小路ヲ東ヘ行カンスラント、走リメクリテミルニ無シ。此ノ女房ハ烏丸ヲ下タリニソ行キケル。暁月夜ニ見ケレハ、入道ノ馬ニ乗タルカ、トモノ物四五人許リ具シテ行合タリ。立チ止リテ物ノイハントスルキ色ヲ見テ、入道馬ヨリ下リテ、「仰ラルヘキ事候ニヤ」ト云ヘハ、左右無クモ云出サス、良久アリテ、「申ニ付テ憚思ヒ侍レトモ、カテノ小路ノ地蔵ニ此ノ日来詣テ申事ノ侍リツルカ、『此ノ暁キノ下向ノ時初メテ相ヒタラン人ヲタノメ』ト云フ示現ヲ蒙リテ侍ヲ、申ニ付テハ、カリアレトモ、申サテモイカヽト思テ」ト云テ、物ノハツカシケナル気色、此入道妻ニヲクレテ三年ニナリケルカ、此ノ地蔵ニ参テ仏ノ御許ヒニ任テ契ヲ結スハントテ、妻モセサリケルカ、地蔵堂ヘ参ル道マテ、カヽル事ノアリケレハ、子細ニモ不及、ヤカテ馬ニ打乗テ帰リヌ。井中ニ所領ナント持チテ貧ツシカラヌ武士入道也ケリ。サテ彼ノ法師ハ、堅走シリ横ニ走リ、履モノ片方ハキテ、汗ヲ流シ息ヲ切リテ走リ廻レトモ、ナシカハ行合フヘキ。（後略）

やはり阿岸本には全体的に独自異文が目立つ。だが、阿岸本独自の語句は、単に米沢本とほぼ同義の別の語句に置き換えられただけではない。その表現は、より大袈裟なものに変えられていると言えるのではないか。例えば、若僧が女房を探し回り、「勘解由ノ小路ヲ東ヘ往カンスラムトテ走ルニ、石ニ足ヲ蹴倒レニケリ。ハルカニテ起上テ東西ヲミルニ無ケリ」や、「汗ヲ流シ息ヲ切リ、ツメカケテ鼻血タリ、求メ廻トモ、ナシカハ行合ヘキ」など、阿岸本独自の語句が付け加わることにより、米沢本よりも若僧の様子に滑稽味が増したと言えよう。

また、巻一「出離祈タルニ神冥ニ事」には、「内裏ニテ五檀ノ大法ヲ被修ケルニ、慈恵僧正ハ中檀ノ大阿闍梨ナリ。御門ヒソカニ御覧有シニ、行法ノ間ハ不動成テ本尊ニスコシモタカヒ玉ハス。寛朝僧正ハ降三世ノ大阿闍梨也」という一節があり、「五檀ノ大法」「中檀ノ大阿闍梨」「降三世ノ大阿闍梨」と、「大」が三箇所に用いられているが、他諸本ではこの「大」はいずれも付されていない。また、巻二「弥陀利益事」では、「名号ノ故ニハ何ナル咎ニモ当ラハ当レト思テ…（中略）…諸仏菩薩ノ境界、イツレモ〳〵信心深クハ現当ノ望モ不レ空カラ」という一節があるが、他諸本では「当ラハ当レ」ではなく、ただ「当レ」とするのみであり、「イツレモ〳〵」も、ただ「イツレモ」とするのみである。このような例は枚挙に遑がないが、いずれもより大袈裟な表現が用いられる傾向があり、阿岸本は他諸本に比べて文飾豊かな本文を持つと言える。

阿岸本を文飾豊かな本文に仕立てたのは、著者・無住本人とは考えにくい。何らかの資料を出典とする際に、無住には簡略に話を引用する傾向がある。[5] 阿岸本は他諸本に比べて全般的に話が膨らまされており、この傾向に反するからである。

(2) 阿岸本の巻

阿岸本のもう一つの特徴として、巻五までしかないことが挙げられる。無住が巻五までで執筆を中断させたと考えられることや、阿岸本の他にも巻五までの内容しか持たない吉川本の存在が知られることから、五巻で完結していた可能性も探られているが、阿岸本に類似した成簣堂文庫旧蔵江戸初期写本全十巻の存在が明らかになったことより、本来は十巻本であった可能性も出てきている。[6]

また、現存の阿岸本巻五は左記の一段で終わるが、[7] 阿岸本巻五が元来この記述を以て完結していたかは疑問である。

有心歌事

鎌倉ノ大臣殿御歌ニ、

ナルコヲハオノカハカセニマカセツ、心トサワク村スヽメカナ

此歌ハ深心ノ侍ルニヤ。

阿岸本巻五の末尾の一段「有心歌事」は、ごく簡単な記述を以て終わる。だが、例えば、梵舜本では、「此歌ハフカキ意ノ侍ルニヤ」と述べた後に法華経を引用し、「フカキ意」について解説を加え、次に道慶の歌を引用して解説を加え、「心アル和歌ノ事」の段が終わる。さらにその後には、「哀傷歌ノ事」「権化ノ和歌ヲ翫給事」「行基菩薩御歌事」の三段が続く。巻五の末尾は、諸本により話の有無や配列などが区々であるので一概には言えないが、「鎌倉ノ大臣殿御歌」について、「此歌ハ深心ノ侍ルニヤ」と述べるに止まるのは余りにも簡略であり、元来は梵舜本等と同様に、法華経を用いた「深心」についての解説等が続いていた可能性も考えられる。また、阿岸本巻五の目録には、「有心歌事」の後に「哀傷歌事」「権化翫和歌給事」「行基菩薩御歌事」の三標目が続くのである。

だが、阿岸本がかつては全十巻であったとしても、後半の五巻が失われたのはかなり早い時期であったのではないか。阿岸本巻二の巻末には、「袈裟ノ功徳事」が所収されている。この直前の一段「仏法結縁事」にも袈裟についての話があり、袈裟を連想の契機として、この位置に所収されたと考えられる。しかし、ほぼ全ての伝本において、「仏法結縁事」が巻二の末尾であり、「袈裟ノ功徳事」は古本系諸本では巻六の末尾に、流布本系諸本では巻六上の末尾に所収する。阿岸本と同時に他の伝本を読んだ人物が、巻二の末尾「仏法結縁事」に袈裟の話があることに着目して、「袈裟ノ功徳事」を書き写したのではないか。ならば、その時点で、阿岸本には巻六が—おそらく巻六を含む後半の巻が—

なかったと考えられるのではないだろうか。

二　『沙石集』諸本における阿岸本の位置付け

(1)　先行研究

阿岸本は、日本古典文学大系の諸本解題では「広本／五帖本」の項に掲げられ、新日本古典文学全集の諸本解題では「古本系／第二類十帖本」の項に掲げられる。刊本の識語に「此集行于世尚矣本有広略条」[8]と記されて以来、諸本を広本・略本に大別する見方が主流であったが、略本系諸本に広本系諸本にはない説話が多く含まれる等、この名称は諸本の概要を示すのに余り適切ではないと言える。よって、新日本古典文学全集の諸本解題に倣い、本稿においても、成立に比重を置いた古本系・流布本系という名称を用いることとする。

諸本の概要については第三章において述べるが、阿岸本を含む古本系第二類は、古本系第一類と流布本系との中間的な本文を有するという特徴を持つ。また、今までに阿岸本との類似性を指摘されたことのある写本は三本ある。真福寺本は巻四のみの零本であり、その全体像は明らかでないが、直接の書承関係はないものの、本文や構成が阿岸本に似ていることが報告されている[9]。また、先にも触れたが、成簣堂文庫旧蔵江戸初期写本は特に巻一から巻三において阿岸本と類似性を持つと報告されている[10]。

だが、最も早く阿岸本との類似性が指摘されたのは内閣文庫第一類本であろう。日本古典文学大系の諸本解題において、「本書（阿岸本…引用者注）の本文には裏書が極めて多く、内閣第一類本と、甚だ近いものがある」と指摘されている。しかしながら、阿岸本と内閣文庫第一類本との具体的な比較は未だになされていない。それは、阿岸本の独自異

文の多さもさることながら、裏書を多く有する内閣文庫第一類本の性質を分析し切れていないことにも一因があろう。よって、改めて内閣文庫第一類本の性質を捉え直し、阿岸本と比較したい。

(2) 内閣文庫第一類本の特徴

現存する内閣文庫第一類本は、巻一から巻五までと巻九である。これとは別に、巻六・七・八・一〇から成り、流布本系に属する内閣文庫第二類本があるが、両者は明らかに別筆である。内閣文庫第一類本の欠損した巻を、後人が補ったということになろう。

渡邊綱也は日本古典文学大系の諸本解題において、「本書（内閣文庫第一類本…引用者注）の特徴は、甚だ裏書の多いことであり、この裏書の中に、広本系の諸本にのみ収録されている説話と合致するものがある」と指摘し、内閣文庫第一類本を広本系（古本系）に分類する。内閣文庫第一類本に大量に見られる裏書の中に、古本系の本文と一致するものがあるのは事実である。だが、裏書を切り離し、それ以外の本文だけに焦点を当てると、そこにはまた別の特徴が浮かび上がってくる。

『沙石集』の本文は古本系と流布本系とで対立することが多々ある。例えば、巻一第七話に含まれる桓舞僧都の話の末尾に、内閣文庫第一類本には、「行基菩薩ノ御遺誡ニモ一世ノ栄花利養ハ多生輪廻ノ基也トノ給ヘリ」という一文がある。諸本を見渡してみると、流布本系諸本はすべてこの一文を持つが、阿岸本を含む古本系諸本の中にこの一文を持つものはない。また、古本系巻十本（流布本系巻九）「証月房遁世ノ事」における性親親王の話では、古本系諸本は「一条院ノ御時ト承レトモタシカニハ不レ覚。時ノ摂録ノ御女、二歳ニ成給ケルカ」と始まり、「后ノ御名ヲモ承シカ忘却シ侍ルナルヘシ」[11]と終わるが、流布本系諸本は「一条院ノ御時ニヤ、時ノ摂禄御堂ノ関白道長ノ御女、二歳ニナリ給

ケルカ」と始まり、「上東門ノ女院是也」[12]と終わり、古本系と流布本系とで本文が対立する。この点においても、内閣文庫第一類本は流布本系諸本と一致するのである。ここでは二例を挙げるに留めるが、裏書以外の本文で古本系と流布本系とが対立した場合に、内閣文庫第一類本は流布本系に一致する傾向がある。

このような傾向は巻の構成にも表れている。巻の構成は、前半の巻五までは諸本間で大きな差異はないが、後半の巻六以降において古本系と流布本系とで大きく食い違う。古本系の巻九は流布本系の巻六下の内容に相当し、また、流布本系の巻九は古本系の巻一〇本に巻一〇末の冒頭部を加えたもの、流布本系の巻一〇は古本系の巻一〇末の冒頭部を除いたものに相当する。ところが、内閣文庫第一類本の巻九は、流布本系の巻九の内容と一致するのである。

内閣文庫第一類本の裏書を切り離し、それ以外の本文だけを対象とするのであれば、その本文はむしろ流布本系に分類すべきであるということが出来よう。

(3) 阿岸本と内閣文庫第一類本――諸本間の位置付け――

第一章で述べた阿岸本の特徴的な本文は、内閣文庫第一類本には見出せない。前段で述べたように、内閣文庫第一類本の裏書以外の本文は流布本系寄りである。それにもかかわらず、阿岸本と内閣文庫第一類本との類似性が言われているのは、以下に引用する本文の如く、阿岸本・内閣文庫第一類本のみに見える独自異文が存するからであろう。[13]

○此三宝、梵網ノ自讃毀他戒ヲタモテル手本ナルヘシ。賢ヲミテヒトシカラント思ハヽ、自其跡ヲ跡時節有ルヘケンヤ。（巻三・二六丁裏）[14]

○裏書云、隠遁ノ本意ハ、一向求菩提ノ為也。然ニ誠ニ道念ナシト云ヘトモ、其身貧シテ人ニ立マシレルモ、サスカ片腹イタク覚ヘテ、衣ノ色コク染テ侍レハ、少シ心安ク、ヨシハミテ侍リ。必シモ名利ノ為トハ思ハネトモ、中々

身モヤスラカナリ。殊ニ貧家ハセメテ遣方ナラハス。恥ヲ思テモ、便宜ノ遁世ハスヘキニコソト思ツ、ケ侍リ。

世ヲスツルスカタトミエシスミソメノ袖ハマツシキ恥カクシカナ（巻三・三五丁表）

○裏書云、賢愚経ノ中ニ、在世ニ沙門、乞食ルニ、或貧家ヘ往ヌ。彼ノ家ノ夫婦、互ニ物念ヘル色アリ。其志ヲ互ニ問フニ、二人ノ志シ同カリケレハ、同心悦。聖者ニハ難レ値、中ノ一衣ヲ供養セント思フ。但シ一人カ衣ニ非ス。仍テ互ニ其心中ヲハカルニ、同心也ケレハ、是ヲ内ヨリ投出シテ供養ス。爾時ニ沙門云ク、「僧ニ供養ヲ演ルハ、手ニ捧テコソ供養スレ。此作法非儀也」ト云ヘリ。夫婦答云、「我等貧ニシテ、二人カ中ニ、此ノ一衣ハカリ持テ、互ニ指出シテ侍ヘリ。裸ナル事ヲ恐テ不出」云。沙門、此志ヲ感シテ丁寧ニ呪願シ、忽ニ仏所ニ詣テ、此由ヲ申ス。其砌ノ国王・夫人等ノ集会、此事ヲ聞玉テ、感歎ノ余リ、衣裳等多ク調ヘ送テ、召出サレケリ。仏ケ、種々ニ褒美讃嘆アリ。是順現業也。是コソ、物無レトモ、以レ志ヲ行スル手本ナレ。（巻四・三丁表～三丁裏）

○裏書云、背覚合塵ト立ルハ、首楞厳経ノ中ニ、衆生ノ迷信ノ始ヲ説ケリ文也。経云、知見立知即無明、本知見無見、此即涅槃。知見咎無シ。能所ヲ立テ覚霊ヲハスレ、一性ニ背クヲ云背一ト。是凡夫ノ相也。知見ニ無見ナル背塵合覚ノスカタ始覚ノ悟ナリ。一念無念ナラハ即涅槃也。（巻四・三三丁表～三三裏）

○裏書云、遺教経ノ意ヨミタル歌ノ処。遺教経ハ、御入滅ノ夜半ノ最後ノ御遺誡也。仏弟子タラン人、是ヲ身モハナタス翫ヒ、読モ覚ヘヘキニ、諸寺ノ僧侶、或ハスヘテ不見ナント云人アリ。アサマシキ事也。仏子ト争テイハン。経云「汝等比丘、於二諸功徳一ニ、常当一心捨諸ノ放逸ヲ一、如離怨賊、大悲世尊ノ所説利益、皆已ニ九九セリ。汝等但当勤テ而行之、若於山間、若空沢之中ニモ、若ハ在樹下閑処静室、念所受法勿令忘失、常ニ当ニ自ラ勉精進シテ修之、無レシテ為ス事空ク死ナハ、後到有悔、我如ク良医知病説薬、服与不服非医咎也。」又如善道々人善道聞之、不行非道

過ニハ也。此一段殊肝要ナル故ニ、若本文要覧ノ人ヤ御座ストテ抄畢。御遺言也。是許セメテハ壁ノ上ニモカキ、坐ノ右ニモ置、心ニ染メ、口ニ付給ヘシ。穴賢々々。病メハ知リ前路ニ資糧少事ヲ、老テ覚ス平生ノ事業ノ非タル事ヲ。無数青山隔ツ江海ヲ。与誰同ク往、亦同ク帰ル。在世ハ再生婆羅門ト云シカ、盛ナル年過テ仏所ヘ参タリシニ、仏告給シ文意ニ似タリ。再生汝今過タリ盛位ヲ、死垂シテ将ニ近ト炎魔王一、欲レハ往ト前路ハ無資糧、求レ住ント中間ニ無所止。裏分（巻五・二〇丁裏～二一丁表）

○裏書云、世間文字常ノ詞用ル様ニ依テ、歌トモナルカ様ニ、仏ノ用給テ、タラニトナル処、宝論ノ中ニ、俗ト僧トノ問答アリ。俗問云「五経文（俗経也）、三蔵ノ字是同シ。受持セン何ノ別カアラン。」僧答云「譬ハ天子ノ勅書、百姓ノ往来ノ文字同ケレトモ、功用大ニ異ナリ。勅書一命シテ賞罰アレハ、是ヲ悦ヒ此ヲソシル。経法ハ勅書ノ如シ、文書往来ノ如」ト云リ。殊勝也。サレハ、仏ノ用ノ時、世間ノ文字タラニトナリテ徳用アル事信スヘシ。（巻五・二二丁裏～二三丁表）

右記の本文は現存本では表面に書かれているが、「裏書云」などとされ、元来は裏書であったと考えられる。これら阿岸本の裏書が、内閣文庫第一類本にも裏書として記載されている。渡邊綱也が述べる「広本系の諸本にのみ収録されている説話と合致する」内閣文庫第一類本の裏書とは、これら阿岸本の裏書と一致する箇所をも指すのであろう。現存する内閣文庫第一類本においても、裏書とされる本文は表面に書かれているが、巻末や章段の末尾にまとめて記載されることが多く、本文の合間に裏書を記載する阿岸本とは、収録箇所が異なることも多い。しかし、それは書写の過程において裏書の写し方が異なっていただけのことであり、阿岸本の裏書も内閣文庫第一類本の裏書も、元来は同じ箇所に付されたものであったのだろう。

つまり、裏書以外の本文を見れば、内閣文庫第一類本は流布本系寄り、阿岸本は古本系であり、両者の本文は性格を異にするが、裏書のみに着目すれば両者は同様の本文を持つことになる。この事実をどう解釈すべきであろうか。

考慮すべきは、裏書という体裁を取るからには、本文を一通り書き終えた後で書き加えた箇所であるということである。裏書以外の本文の執筆を第一段階と呼ぶならば、裏書の執筆は第二段階、もしくはそれ以降の段階と言えるだろう。まず、古本系の本文を持つ阿岸本の原型と流布本系寄りの本文を持つ内閣文庫第一類本の原型がそれぞれ別個に存在しており、両者に裏書として後から補入された部分に共通した資料が用いられたのではないか。

もとより阿岸本と内閣文庫第一類本のすべての裏書が一致するわけではなく、先述の考えがすべての裏書に当てはまるわけではない。だが、右記の裏書などは、阿岸本と内閣文庫第一類本以外の諸本に見出すことの出来ないものである。少なくとも阿岸本と内閣文庫第一類本の裏書の一部については、共通する資料を以て書き加えられたものと言えよう。

また、以下の本文も、先に引用した本文と同様、阿岸本・内閣文庫第一類本にのみ見られる。「裏書云」などの語句は付されていないが、右に掲げた裏書と同様、阿岸本・内閣文庫第一類本共に共通した資料を用いて補入された可能性や、元来は裏書であった可能性を捨てきれない。

○盲目ノ法師、伊勢大神宮ニ参詣シテ、八月十五日読ケル。

ナカメハヤミモソ河ノ清セニイカニ月影サヤカナルラム

ソノ朝、目ハアキニけり。（巻五・二五丁裏）

○塩谷ノ民部入道ト聞シ歌人也。他力本願ノ心ヲ、

ヨシサラハ我トハサシアマヲフネミチヒクシホノナミニマカセテ
田有者ハ田ヲ愁へ、宅有者ハ宅ヲ憂ト云心ヲ、
ノハキセハ門田ノイネモシホレナムイホノノキハノアル、ノミカハ（巻五・三一丁裏）

三　『沙石集』諸本概括

最後に、僅かながら新たに付け加えることもあるので、『沙石集』諸本を概括しておきたい。なお、内閣文庫第一類本については、第二章で述べた通り、裏書以外の本文が流布本系の特徴を色濃く見せることを考慮し、流布本系に分類した。これは、裏書とそれ以外の本文とを切り離し、執筆の第一段階である裏書以外の本文の存在を重視したことによる試みである。裏書とそれ以外の本文を切り離すことなく、裏書が古本系の特徴を見せることに重点を置けば、内閣文庫第一類本を古本系に分類する方法もあることを申し添えておく。

◎古本系・第一類[15]　○俊海本系　俊海本[16]
　　山岸本Ⅰ（俊海本巻一・七転写本）
　　山岸本Ⅱ（俊海本巻一〇上転写本）
　　○米沢本系　米沢本[17]
　　元応本（北野本[18]）
　　藤井本[19]

俊海本が最古の写本であり、最も古態を留めていると思われるが、巻一・七・一〇上しか現存せず、その全体像は明ら

かでない。現存する巻を見る限り、米沢本などとは異なる独自異文を持つ伝本である。なお、山岸本Ⅰと山岸本Ⅱは共に俊海本からの転写本であるが、俊海本はもともと巻一・七と巻一〇上とが別々に所蔵されていたためか、山岸本の所蔵者である実践女子大学でもそれぞれ別の請求記号を付しており、本稿においても山岸本Ⅰと山岸本Ⅱとに分けて記載することにした。

◎古本系・第二類　○梵舜本系　梵舜本[20]

○阿岸本系　阿岸本[21]

成簀堂文庫旧蔵江戸初期写本[22]

真福寺本[23]

同じく古本系であるが、俊海本や米沢本の系統と流布本系との中間的な本文を持つため、俊海本や米沢本の系統からは切り離し、新たに別の系統を立てることが必要だと考えられている。中でも、梵舜本は独自の説話を多く持ち、諸本中最多の話数を誇る点で、この系統においても独自の色彩を放つ。

◎流布本系　○写本　内閣文庫第一類本

長享本[24]

吉川本

山岸本Ⅲ（吉川本全十巻転写本）

東大本

仏法寺本[25]

神宮文庫本
園城寺勧学院本[26]
岩瀬文庫本
名古屋大学小林文庫本（岩瀬文庫本転写本）
内閣文庫第二類本
慶長十年古活字版[27]
元和二年古活字版
元和四年古活字版
元和二年整版
正保四年整版
慶安五年整版
天和三年整版
貞享二年整版[28]
貞享三年整版[29]
秋田県立図書館本（慶長十年古活字版の写し）
国会図書館本
学習院大学蔵平仮名十巻本

○刊本

○刊本の写し

流布本系諸本には、古本系諸本に見られたような構成上の大きな相違はない。ただし、流布本系の中でも比較的書写の古い長享本・吉川本と、比較的書写の新しい神宮文庫本・岩瀬文庫本並びに刊本の本文とが対立するケースが少々目立つ。また、多くの裏書を持つ内閣文庫第一類本については既に述べたので繰り返すことはしないが、その他の写本にも極僅かではあるものの、独自増補説話がある。ただし、古態を留めているのは古本系諸本であり、流布本系の一本のみが持つ説話を取り上げて、著者・無住の手によるものと断じるのは困難であろう。

刊本は誤刻[30]等を除いていずれもほぼ同じ本文を持つが、慶安五年整版本と天和三年整版本は、片仮名本が主流の『沙石集』諸本においては珍しい平仮名本である。天和三年整版本は慶安五年整版本の後刷りであり、現存する平仮名整版本は実質的に一種のみということになる。なお、学習院大学蔵平仮名十巻本については、学習院大学が所蔵する俊海本巻一〇上と区別するため、このような名称を付した。国会図書館本と共に平仮名刊本の写しと見られるが、もとになった平仮名刊本は慶安・天和の平仮名整版本と同一ではないらしい。[31]

この他に、抜書本として『金撰集』[32]・『金玉集』[33]・『見聞聚因抄』[34]・『砂石集抜要』[35]・仙台市民図書館蔵本[36]・『沙石集略抄』[37]が知られており、『沙石集略抄』のみが刊本である。これらは『沙石集』の流布を示す資料でもあり、また、抜書本の原本を想定することも諸本研究に有益な面があると思われる。

以上の概括は、先行研究をふまえた上での稿者なりの分類であるが、内閣文庫第一類本の分類法を除き、基本的には先行研究から大きく逸脱するものではない。内閣文庫第一類本の分類法についてはまた御教示を賜ればと思う。

『沙石集』の諸本は多種多様を極めており、各本の位置付けを定め、諸本を系統立てて整理することは困難である。新しい伝本の出現を期しつつも、今回特に阿岸本を取り上げて内閣文庫第一類本と比較した如く、既に存在が知られて

いる伝本についても、その特徴や諸本間の位置付けを改めて見直し、翻刻などを進めていくことが肝要であると考えられる。

注

(1) 句読点等は私による。以下、同じ。
(2) 梵舜本の引用は日本古典文学大系『沙石集』(渡邊綱也、岩波書店、昭和四一年)による。以下、同じ。
(3) 新日本古典文学全集『沙石集』の解説(小島孝之、小学館、平成十三年)において、阿岸本と梵舜本は共に古本系第二類に分類される。他に、日本古典文学大系の解説など参照。本稿においても第三章で諸本を概括した。
(4) 米沢本の引用はマイクロフィルムによる。句読点等は私による。以下、同じ。
(5) 「『沙石集』と『発心集』」と題した口頭発表において、『沙石集』と『発心集』や『十訓抄』との本文を比較検討した(平成十三年度中世文学会秋季大会)。
(6) 土屋有里子「成簀堂文庫蔵『沙石集』の紹介」『国文学研究』第一三一号、平成十二年
(7) この後に書き込みがあるが、明らかに別筆であり、『沙石集』とは関係のない内容と考えられる。
(8) 引用は『沙石集総索引』(底本・慶長十年古活字本)による。
(9) 安田孝子『説話文学の研究』和泉書院、平成九年二月(初出「大須真福寺本『沙石集』について」『椙山女学園大学研究論集』第六号、昭和五十年三月・『大須文庫本　沙石集―翻刻・解説―』昭和五一年三月)
(10) 注(6)に同じ。
(11) 引用は米沢本による。
(12) 引用については注(8)に同じ。
(13) お茶の水図書館成簀堂文庫が現在閉室しているため、成簀堂文庫旧蔵江戸初期写本については話の有無を確認出来ていない。

(14) 本文の引用、括弧内の丁数は阿岸本による。内閣文庫第一類本の引用は省略するが、用字等を除き、ほぼ同文。
(15) 「古本系・第一類」「古本系・第二類」「流布本系」等の名称は新日本古典文学全集の諸本解題に倣う。
(16) 久曾神昇「古鈔本沙石集零本」『書誌学』巻十三第二号、昭和十九年九月／古典研究会叢書第二期（国文学）『沙石集（1）』汲古書院、昭和四八年十月
(17) 渡邊綱也『広本沙石集』日本書房、昭和十八年五月／小島孝之、新日本古典文学全集『沙石集』小学館、平成十三年
(18) 北野克『元応本沙石集』汲古書院、昭和五五年七月
(19) 藤井隆「広本沙石集の新出古写本について」『帝塚山短大紀要』第三号、昭和四十年十二月／古典研究会叢書第二期（国文学）『沙石集（2）』汲古書院、昭和四八年十月
(20) 渡邊綱也、日本古典文学大系『沙石集』岩波書店、昭和四一年
(21) 上野陽子「阿岸本『砂石集』翻刻」『三田国文』第三四号～第三六号、平成十三年九月・平成十四年三月・六月
(22) 注(6)に同じ。
(23) 注(9)に同じ。
(24) 潁原退蔵「沙石集の長享古写本について」『大谷学報』第十巻第二号、昭和四年六月
(25) 櫛田良洪「虫余漫筆（十）―沙石集・群疑論註釈書の古写本の発見―」『大正大学学報』第三七号、昭和五十年十二月／清水宥聖「仏法寺本『沙石集』について」『大正大学大学院研究論集』第二号、昭和五三年二月
(26) 石井行雄「園城寺勧学院本『沙石集』について」（平成十三年度説話文学会大会における口頭発表）
(27) 深井一郎『沙石集総索引』勉誠社、昭和五五年三月
(28) 稲垣泰一「架蔵貞享二年版『沙石集』について」『説話』第十号、平成十二年二月
(29) 筑土鈴寛、岩波文庫『沙石集』、岩波書店、昭和十八年
(30) 例えば、巻二第十話に、蛤・犬・牛・馬・人と生まれ変わる話があるが、貞享三年整版本では「舎利讃嘆ノ声ヲ聞シ故ニ死シテ後天王寺ノ犬ニ生ル」（引用は『沙石集総索引』）という一節がなく、蛤から牛に生まれ変わったことになっている。
(31) 「『沙石集』平仮名本について」（季刊『ぐんしょ』第五五号、平成十四年一月）において詳述。

(32) 美濃部重克「「沙石集」の一本、「金撰集」」『説話文学研究』第六号、昭和四七年二月／西尾光一「再び伝承的・重層的評論について—神宮文庫蔵『金撰集』をめぐって—」『山梨大学教育学部研究報告』第二二号、昭和四七年二月／西尾光一・美濃部重克『金撰集』古典文庫、昭和四八年一月

(33) 安田孝子・奥村啓子「翻刻　金玉集」「金玉集」解説」『椙山女学園大学研究論集』第四号・第五号、昭和四八年三月・昭和四九年三月／下西忠「沙石集抜書の方法—金玉集について—」『中世文芸論稿』第一号、昭和五十年四月

(34) 織田顕信「『沙石集』流伝余考—新出満生寺抄本をめぐって—」『同朋仏教』第十三号、昭和五四年七月／渡辺信和「満生寺蔵『見聞聚因抄』第四—『沙石集』の抄出異本—」『伝承文学研究』第二九号、昭和五八年八月

(35) 徳永圭紀・大木桃子・平田英夫・松下倫子「翻刻「砂石集抜要」」・徳永圭紀「「砂石集抜要」解説」『国語国文学研究』第三十号、平成六年十二月

(36) 上野陽子「仙台市民図書館蔵『沙石集』抜書本　翻刻」『三田国文』第三十号・第三一号、平成十一年九月・平成十二年三月／上野陽子「仙台市民図書館蔵『沙石集』抜書本について—『沙石集』諸本研究の一材料として—」『藝文研究』第七九号、平成十二年十二月

(37) 安田孝子『説話文学の研究』和泉書院、平成九年二月（初出「『沙石集』を近世は如何に受けとめたか」『椙山女学園大学研究論集』創刊号、昭和四五年三月）

資料の閲覧及び翻刻の御許可を賜った阿岸本誓寺ほかの文庫・図書館に対し御礼申し上げます。